

雅樹はシンバルを叩く猿のおもちやのように、滑稽なほどすごい速さで、腰をふった。

謎の男に、しっかりと尻をつかまれ、後ろからマシンガンのように突きまくられている。そのことを知らずに綾は甘く切ない悲鳴をあげていた。

それは俺のやることだつ。絶頂寸前から一瞬のうちに地獄の底に落とされ、アキラの歯はギリギリ鳴った。

「このやろうつ。なめてんじゃねえぞつ」

ようやく立ち上がり、男に襲いかかる。しかしいきなり脚を取られ、顔から地面に突っ込んだ。踏み出した脚がなにかに絡めとられていた。

「!？」

訳がわからず脚を見ると、うねうね蠢く蛇のようなものの巻きついている。

「なんだよ。これはあつ」

アキラは脚だけではなく腕も謎の生き物に絡み取られ、芋虫のように地面に転がされた。「なにいつ、なんなのっ」

さすがに異変に気がついた綾が振り向いて、悲鳴をあげた。

「誰よ、あんたっ」

彼氏としているはずが、いつの間にか、見知らぬ男の男根を受け入れていた。

それで、彼氏にしか聴かせてはいけない声をあげていた。

しかも彼氏は男の後ろで地面を這いずり、もがいていた。

下半身だけ裸で、性器を丸出しにしてもがくアキラの姿は、見ようになつては滑稽だったが、綾にそんなことを感じる余裕は、もちろんなかった。

「誰なんだようっ」

しゅるるる。

あつと思つた時には、両腕が木に回され、手首のところになにかヌメつたものが巻きつく。

どん。

綾は頬を木の幹に押しつけられる形で、拘束された。

下半身を揉んで、胎内に入りこんでいる男根を抜こうとしたが、男はもの凄い力で尻を

つかみ、離さない。

それどころかさらに激しく突きはじめた。

ドッ、ドッ、ドッ。

突かれるたびに、綾は自分の身体がいったいいっぱいになる。アキラにされるのとは、まったく違った。

けほっ。

男のものが奥まで入ると、息をするのも苦しくなる。熱い。そして圧倒的に太かった。

限界いっぱいまで大事なところが拡張されてしまう。声も出せない。今まで突かれたことのない奥がつかれる。直接、子宮を打撃される。

綾は空気を求める魚のように口を開けた。

あたし、気持ちいいの？

あたし、苦しいの？

なにもかもが混沌として、わからなかった。

振り向く自由がないために、男の顔は見えない。

怒っているのか。

笑っているのか。

どんな表情をしているのかさえわからなかった。ただ犯された。

男の筋骨がたくましいことだけは、身体で感じていた。

綾、綾と自分を呼ぶ声がする。

彼氏が見てる前で、されちゃってる。口惜しかった。彼氏に濡らされ、熱く燃えた身体

を、好きにされてしまっていた。脳が痺れてきた。

ずん、ずん、ずん

一段と深いところを突かれる。

「あつ、あああつ」

そこつ、だめつ。

綾は自分から木を抱きしめた。なにかにつかまって耐えないと、どこまでも堕ちて行きそうだった。

「ダメだ、綾。ダメだつ」

アキラの声が聴こえた。

こんなわたし、見られちゃってる。

ほかの男の人に入れられてエッチな声出してるところ、見られちゃってる。

綾の頬をほろほろと涙がつたつた。

だが、すでに出来上がっていた華奢な身体は、胎奥を突かれるたびに、あつ、あつとサカリ声を漏らして反応してしまう。

綾は自分の雌の身体が恨めしかった。

子宮を直接、突かれてる。こんなの……っ。

そう思うと、あの危険な感覚が来た。

ダメっ。それだけはダメ。

ヒステリックになった綾が、かぼそい身体を揉んで暴れたが、男にとってその抵抗は、猫にじゃれつかれくらいにしか感じないようだった。

カオスの中で、必死で耐えていたものが弾ける。

「い、いっくう」

綾は細い背をえびのようにそらし、全身をぶるぶる震わせた。その姿には、か細いなりに、若い女の力強さがあつた。

「綾……、綾……っ」

アキラの泣きじゃくる声が聴こえた。オルガスムスの余韻に身を震わせながら綾も泣いていた。

イツちゃった。イカされちゃった。顔も知らないオヤジに。

これほどの屈辱はなかった。

「お願い、もう許して……」

敏感な身体を震わせながら、綾は子どものように泣きじゃくっていた。だが男は、達したばかりの綾の白い身体を木から引き剥がし、地面に転がす。

ひ
い
い
い
い
い
い
つ。

綾は悲鳴をあげた。

自分の周りを、鎌首をもたげた蛇のようなものが無数に取り巻いていたのだ。まるでイソギンチャクの口のように、無数の触手がうねうね蠢いていた。

おぞましきのあまり、ほとんど気を失いかけていた。

夢だ。
これは悪夢だ。

こんなこと、現実のはずがない。

ぶんつ、ぶんつ。

綾の両手が、触手につかまる。

ひっと叫んだ時には、両脚もつかまれた。

ぐんつ

触手は、意外な強靱さで綾を拘束し、四肢を拓いた。小ぶりの胸乳がふるふるえた。

綾は大の字になって、地面に磔にされていた。

「なんなんだようーっ、これはーっ」

アキラが腸（はらわた）を絞り出すような声で、絶叫した。

一体、なんなんだ。

男も謎だったが、今、自分を拘束している触手も不気味だった。

黒くぬらぬらとしていて、見た目はウナギに近い。ヌメヌメと蠢く動きも、ウナギのようだ。

だが、目はない。というより頭というものがないみたいだった。

むしろ先端は、皮をかぶった陰茎に似ていた。ちょうど卵くらいの大きさにふくれあがり、先から、紅色の肉がちらちら見える。生臭い匂いを放っていた。

人の性器に似ているせいか、その動きは恐ろしく淫らに見えた。見ているだけで、淫らかな気分がかき立てられ、身体の奥が熱くなる。そんな妖しさがあった。

そんなものが、無数に生えていた。

力は意外と強靱で、振り払っても振り払っても、触手は蠢き、しつこくからみついてくる。体力だけが急激に奪われていった。

突然に放り込まれた異常な状況の中で、それでもアキラは足掻いていた。